兵庫教育大学　研究紀要　第59巻　2021年９月　pp. 151－163

日本語における気象現象に関するオノマトペの記述研究

A Description of Japanese Onomatopoeic Words on Atmospheric Phenomena

PHAM Thi Linh Chi*

本論文は、日本語におけるオノマトペ表現のうち、特に〈気象現象に関するオノマトペ〉を考察対象として、形態論および音韻論の観点から分析を行うものである。

本論文で日本語の〈気象現象に関するオノマトペ〉を分析するにあたり、〈気象現象に関するオノマトペ〉の下位区分に関する分類法を提案し、独自に〈光に関するオノマトペ〉〈水に関するオノマトペ〉〈空気に関するオノマトペ〉という３つのカテゴリーを設定する。その上で、３つのカテゴリーごとに形態論的分析および音韻的分析を加えつつ、先行研究の記述を整理した。そこで整理された先行研究の記述と母語話者の実感との異同を明らかにするため、浜野（2014）を参考に、①無声と有声、②長音の有無、③母音ｏとａ、④促音と「り」の関係という４つの観点からアンケート調査を行った。その結果、(ⅰ)先行文献で「有声音＝不快」という一般的な特徴が指摘されているものの、風が吹く音に関しては、風の強弱と快不快の関係に個人差が大きいために、相関関係を確認できなかったが、(ⅱ)促音「っ」と「り」を使って稲妻が光る様子を表現するのに、語尾に促音「っ」を伴うものの方が語尾に「り」を伴うものより強く感じられることが分かった。また、(ⅲ)母音ａと母音ｏを使って雷鳴がとどろく音を表現するとき、アンケート調査をした限りでは、母音ａの拡大性は支持されていると言えるが、拡がり方を明確に捉えることは難しいことが分かった。

キーワード：オノマトペ，日本語，気象現象

Key words：onomatopoeia,　Japanese,　atmospheric phenomena

１．はじめに

本論文の目的は、日本語におけるオノマトペ表現のうち、特に〈気象現象に関するオノマトペ〉を考察対象として、形態論および音韻論の観点から分析を行うことにある。本論文が〈気象現象に関するオノマトペ〉に焦点をあてた理由として、日本語のオノマトペに関する近年の研究が〈スポーツオノマトペ【1】〉〈メディカルオノマトペ〉〈食感表現のオノマトペ〉などのように一定の領域に限定したものが多くなってきている中で、〈気象現象に関するオノマトペ〉を取り上げた研究が少ないという事情がある。

本論文が分析対象とする〈気象現象に関するオノマトペ〉の特徴を浮かび上がらせるため第２節でオノマトペの分類法を再検討し、あらためて〈光に関するオノマトペ〉〈水に関するオノマトペ〉〈空気に関するオノマトペ〉という３つのカテゴリーへの分類法を提案する。その上で、第３節から第５節において、それぞれ〈光に関するオノマトペ〉〈水に関するオノマトペ〉〈空気に関するオノマトペ〉に対して形態論的分析および音韻的分析を加える。その際、各カテゴリーに属するオノマトペの例示は、基本的に小野（2007）の『擬音語・擬態語4500　日本語オノマトペ辞典』をベースとする。最後の第６節では、〈気象現象に関するオノマトペ〉について、先行研究における記述と母語話者の実感との異同を調べるために、独自に日本語話者に対してアンケートを実施し、その集計と分析を行うこととする。

２．気象現象に関するオノマトペ

この第２節では、〈気象現象に関するオノマトペ〉とは何かを規定し、分類方法を整理するが、その前に気象現象の定義について触れておきたい。和達（1974）は、『新版 気象の事典』において、気象現象（weather phenomena）とは、風が吹く・雨や雪が降る・雲ができる・太陽光線が散乱するといった大気の状態とその変化の現象の総称と述べている。ここで「総称」という表現が用いられているように、「気象」とは総称的な概念であり、類義語として「天気」「天候」「気候」がある中で、本論文でいう「気象」という用語には「天気」「天候」「気候」を含む広い概念として考えなければならないことがわかる。

次に、オノマトペと気象現象の関連について、先行研究や辞典を参考にしながら説明する。杉田（2014）の『宮沢賢治のオノマトペ』には、気象現象における「気象」「風」「霧・雨・雪・霜・雲」「水」「光」という項目が設定されており、小野（2007）の『擬音語・擬態語4500　日本語オノマトペ辞典』にも、「天気」における「照る・晴れる」「雨・雪・氷」「風・吹く」という項目がある。こ

＊ダナン大学

令和３年４月23日

のことから、日本語におけるオノマトペには、いくつもの項目が設定されるほど気象現象に関するものが一定数存在していることがわかる。実際、日本語のオノマトペの中で気象現象に関する部分を取り上げた論文も、数こそ多くはないが刊行はされている。その中で、桑原（2016）は、「気候のオノマトペ」を対象とし、日本語のオノマトペの印象を可視化した上で、その印象を体感型システムに実装したものであり、内田（2015）は、天気にまつわるオノマトペを幾つか取り上げて考察している。いずれの文献でも、気象現象という同領域内のオノマトペを中心に取り上げているものの、〈気象現象に関するオノマトペ〉の定義や下位分類にまで本格的に踏み込んではいない。本論文では、〈気象現象に関するオノマトペ〉として、冒頭で触れた気象現象に関する記述に基づき、「大気の状態、および雨・風・雪など大気中で起こる諸現象の領域に活用される擬音語・擬態語」と規定することとする。このような記述を採用するのは、気象現象を構成する「大気」や「雨・風・雪」などの主要な要素が含まれているからである。その上で、〈気象現象に関するオノマトペ〉を下位分類する基準も設定しておかなければならない。この点について、田守（2010）は、「森羅万象　賢治オノマトペの世界」というセクションにおいて、「気象に関するオノマトペ」を「雪」「霧」「風」の３つに分けている。しかし、宮沢賢治の用いたオノマトペは非常に独特なオノマトペであって、独自の文学世界を作り出しているものであるので、一般性のある分類を導き出すのに有効とは言えない。そこで、検討の出発点としたいのが小野（2007）による３分類であり、「天気に関するオノマトペ」を「照る･晴れる」「雨･雪･氷」「風･吹く」の３つに大別したものである。具体的には、次の表１～表３の通りであり、本論文は、これに順次、改良を加えていくことで独自の分類を提案することとしたい。

表１「照る・晴れる」から選出されたオノマトペの例

自然	天気に関するオノマトペ	照る・晴れる	春の日ざしがのどかで	うらうら
			日ざしがおだやかで	おっとり
			夏の強い日ざしが照りつけて	かんかん
			真夏の太陽が強く照りつけて	ぎらぎら
			曇っていた空が明るく晴れて	けろり
			水や日ざしが満ち満ちて	なんなん

表２「雨・雪・氷」から抽出されたオノマトペの例

自然	天気に関するオノマトペ	雨・雪・氷	雷の音がとどろき響いて	ごろごろ
			雪やあられが次々と降って	こんこん
			大量の雨が続けて降って	ざーざー
			雨や風などが騒がしく	ざんざら
			雨が勢いはげしく降って	ざんざん
			雨などがしめやかに降って	しとしと

表３「風・吹く」から抽出されたオノマトペの例

自然	天気に関するオノマトペ	風・吹く	強い風が吹きすさんで	ごーっ
			風で木の葉がこすれ合って	さーさー
			瞬間的に風が吹き過ぎて	さーっ
			微風が木の葉の音を立てて	さやさや
			枝や葉をはげしく鳴らして	ざんざ
			すきま風などが吹きこんで	すーすー

小野（2007）による表１～表３の３分類は、「天気に関するオノマトペ」の分類としては分かりやすいものではあるが、必ずしも一般的な語を取り上げたものとは言えず、例えば「（水や日ざしが満ち満ちて）なんなん」などのような古い語が多く収載されているという点に問題がある。そこで、本論文では、独自に、表１～表３の分類を、それぞれ〈光〉〈水〉〈空気〉という観点に置き換えることで、分類の基準を単純化し、結果として、「天気」よりも広い「気象現象」という概念で全体をカバーすることとした。その上で〈光〉〈水〉〈空気〉の観点からの分類を下位分類したものが次の表４である。

表４　本論文の気象現象に関する
オノマトペの意味分類

気象現象に関するオノマトペ	光	太陽 星・月 雲 気温 雷・稲妻
	水	雨 雪 霧 波
	空気	風

表４のように、〈気象現象に関するオノマトペ〉を大きく〈光に関するオノマトペ〉〈水に関するオノマトペ〉〈空気に関するオノマトペ〉の３つに分ける。まず、〈光に関するオノマトペ〉に関して、浅野（1979）では、「日本語

における光に関する表現「光る」と「輝く」の分析から、光源には、太陽・月・星などの「天体」...（中略）...が存在すること」と述べている。正確に言うと、月や星は光源ではなく、太陽の光を受けて（二次的に）光っているように見えるにすぎない。本論文では、そのようにして見えるものも〈光に関するオノマトペ〉の分類に含めて扱うこととする。また、「光」そのものではないものの、光を遮るものとしての「雲」も〈光に関するオノマトペ〉のカテゴリーに入れて扱うこととする。たしかに、雲そのものは水分（水）の粒でできているものであるから、〈水に関するオノマトペ〉のカテゴリーに入れて考えるものと思われるかもしれないが、雲の動きは人間にとって、太陽の光を遮るかどうかというところが大きいので、この観点から〈光に関するオノマトペ〉のグループに入れて扱うこととするものである。次に、気温についても、やはり「光」そのものではないものの、太陽の動き方によって温度が上がったり下がったりした状態を指していることから、〈光に関するオノマトペ〉のグループに入れて扱うこととする。さらに、「雷・稲妻」は、雲と雲との間、あるいは雲と地上との間の放電によって、光と音を発生する自然現象のことであるから、人間にとって「光」として認識されていることから、〈光に関するオノマトペ〉の中に扱う。これらを踏まえると、〈光に関するオノマトペ〉は、さらに〈太陽に関するオノマトペ〉〈月・星に関するオノマトペ〉〈雲に関するオノマトペ〉〈気温に関するオノマトペ〉〈雷・稲妻に関するオノマトペ〉の５つに分けることができる。

次に、〈水に関するオノマトペ〉について、杉田（2014）は「オノマトペを見てみると水がカタチを変えていくことで天気が変わっていくことに改めて気づかされる」と述べている。大気中にある小さな水の粒が低く漂えば霧に、高く集まれば雲に、また、大きくなって落ちてくれば雨、冷やされれば雪となって地上に舞降りてくるという。この観点を踏まえると、「霧」「雨」「雪」は〈水に関するオノマトペ〉のカテゴリーに属すると言えよう。【2】また、〈水に関するオノマトペ〉については、海の水も気象によって動きに影響を受けることから、本論文の考察対象に含めることとする。これらを踏まえると、〈水に関するオノマトペ〉は、〈雨に関するオノマトペ〉〈雪に関するオノマトペ〉〈霧に関するオノマトペ〉〈波に関するオノマトペ〉の４つに分けることができる。

最後に、〈空気に関するオノマトペ〉に関しては、「風」は空気の動きであるから、〈空気に関するオノマトペ〉のカテゴリーに入れて扱うこととする。【3】

３．光に関するオノマトペ

この第３節では、前節での検討を踏まえて〈光に関するオノマトペ〉のカテゴリーを〈太陽に関するオノマトペ〉〈星・月に関するオノマトペ〉〈雲に関するオノマトペ〉〈気温に関するオノマトペ〉〈雷・稲妻に関するオノマトペ〉の５つに分けた上で、それぞれのカテゴリーに属するオノマトペを例示しながら考察を加える。

第１に、〈太陽に関するオノマトペ〉には、太陽そのものが地上を照らす様態を表す擬態語が殆どである。したがって、「ぽかぽか」などのようなオノマトペそのものは「光」ではないけれども、太陽の光がたくさん働くことによって、気温が上がった状態を指していることから、〈光に関するオノマトペ〉として扱うこととする。本論文では、〈太陽に関するオノマトペ〉を細分化して次のように下位分類する。

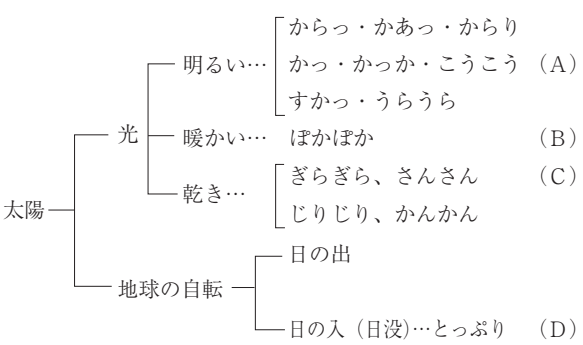

図１　日本語における太陽に関するオノマトペの分類

図１のように〈太陽に関するオノマトペ〉を、太陽の動き方によって〈光〉と〈地球の自転〉に大別する。さらに、「光」を太陽からの放射エネルギー量によって下位分類し、「（A）明るい」「（B）暖かい」「（C）乾き」の３つのカテゴリーを設定する。これに個別に説明を加えると、（A）のオノマトペは、細かな意味や使い方が異なっているものの、「日差しが明るくて穏やかに照っている様子」というイメージを与える点で共通している。（B）のオノマトペも、細かな意味合いでは異なるものの、「日差しが暖かい様子」というイメージで共通する部分がある。（C）のオノマトペは、「太陽が熱く照りつけて身体の一部が焼き焦がすほど暑い（乾き）」という共通の意味合いがあり、この「乾き」という感覚に関して、竹本（2012）の研究を挙げたい。竹本（2012）によると、「か」で始まる擬音語・擬態語の多くが「乾き」を表し、「かんかん照り」という表現も存在することから、「かんかん」が太陽を形容する場合も、同様に「乾き」の意味を内包するとしている。

さらに、地球の動きを大きく見ると、地球は自転している。地球の自転によって「日の出」と「日の入」（日没）という現象が起こる。（D）に挙げたオノマトペは太陽が完全に落ちて、夜の静けさのあたりをつつむ様子を表すものである。

第２に、〈星・月に関するオノマトペ〉について見てみよう。第２節で説明したように、月や星は光源ではなく、太陽の光を受けて光っているように見えるものであるが、本論文では〈光に関するオノマトペ〉として扱うこととする。なぜなら、夜においては地上から月や星の光を見ることができるからである。まず、〈星に関するオノマトペ〉として、次のようなものが挙げられる。

⑴　ぴかぴか　　きらきら　　ちかちか
　　ぴかっ　　きらっ
　　ぴかり　　きらり

⑴に挙げたオノマトペは、音のない星が光る様子を表現した擬態語である。音韻構造の観点から見ると、「ぴかぴか」「ぴかっ」「ぴかり」には共通部分として「ぴか」という〈もと〉があり、「きらきら」「きらっ」「きらり」には共通部分として「きら」という〈もと〉が存在する。小野（2007）は、この〈もと〉について、「オノマトペの中核にあって、基本的なニュアンスを作る。そして、この〈もと〉に、さまざまな、オノマトペらしい成分をつけて、より細やかな味わいを重ねてゆく」と述べている。田守・ローレンス（1999）は、この〈もと〉を「語基」と称しており、本論文でも「語基」と呼ぶことにする。小野（2007）は、上述にあるような「オノマトペらしい成分」とは、「きらきら」「きらっ」「きらり」などに含まれる促音「っ」や「り」のように、語基の後につく語尾を指すという。実際、星に関するオノマトペは、その殆どが「きらきら」の「きら」という語基や「ぴかぴか」の「ぴか」という語基に、促音「っ」や「り」を追加して発生したものであり、語尾の部分が異なることでニュアンスに違いが生じている。ちなみに、「ぴかぴか」も「きらきら」も、光の点滅を表すオノマトペであるが、「きらきら」より「ぴかぴか」の方が大きくて強いという差異がある。このような光に関する擬態語の差異について、前田(2014)は、日本語母語話者の500人を対象にアンケートを企画し、光る主体や場面ごとに調査を行っている。『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』に「星がぴかぴかとまたたいている」や「夜空に星がちかちかとまたたいて」という例文があったことから、同じく「夜空で星が（　）瞬く」という設問で（　）を埋める設問を与えたところ、第１選択肢は「きらっ」であり、「ぴかぴか」や「ちかちか」の選択率は高くなかった。つまり、前田（2014）は第１選択肢が多い「きら系」の方が「ぎら系」や「ちか系」の擬態語より回答が多かったというが、これは頻度を調査したにすぎないという批判も予想されるところである。

次に、＜月に関するオノマトペ＞はきわめて稀で、次のようなものが存在する程度である。

⑵　満月がぽっかり浮かんで見える。

⑵の「ぽっかり」は夜空に満月が軽く浮かんでいる様子を表すが、この「ぽっかり」は、太陽や雲にも使われる。例えば「太陽が雲間にぽっかり顔を出す」や「空に雲がぽっかり浮かぶ」など表現があり、「月」にのみ固有の擬態語は観察されていないということである。

第３に、〈雲に関するオノマトペ〉について検討してみよう。次の⑶のように、〈雲に関するオノマトペ〉として挙げることができる。

⑶　ふわふわ　　ぷかぷか　　ぽっかり
　　ふわっ　　ぷかりぷかり　　ぽかり
　　ふわり　　ぷかり　　すいすい
　　ふわふわり　　むくむく　　どんより
　　ふんわり　　もくもく

⑶の「ふわふわ」や「ふわっ」などには共通部分として「ふわ」があり、「ぷかぷか」や「ぷかり」には共通部分として「ぷか」という語基が抽出できる。その語基としての「ふわ」や「ぷか」に様々なオノマトペらしい成分（語尾）をつけて、オノマトペにニュアンスの違いを生じさせる。具体的に、「ぷかぷか」は「軽やかに浮かぶ様子」を表すが、「ぷかり」と「ぷかりぷかり」は空中に浮き上がる様子を表す。語基が異なれば、雲の状態が異なる。例えば、「むくむく」と「もくもく」は、双方とも「雲が上がっていく様子」を表現するが、前者は「勢いよく湧き上がる様子」を表し、後者は「次々と重なり合うように湧き上がる様子」を表す。また、「どんより」は、「雲が空を覆っている様子」の表現であり、その結果として太陽の光が遮られ全体が暗くなる状態を表す。このことが「雲」を〈光に関するオノマトペ〉のカテゴリーに入れた理由にほかならない。

第４に、〈気温におけるオノマトペ〉を温度差によって〈寒い〉〈暖かい〉〈暑い〉の３つに下位分類し、次の図２のように示すこととする。

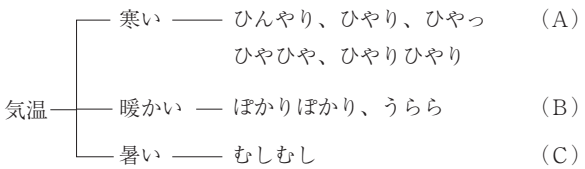

図２　日本語における気温に関するオノマトペの分類

図２のように、〈気温に関するオノマトペ〉を「(A)寒い」「(B)暖かい」「(C)暑い」に分ける。まず、(A)に挙げたオノマトペは、温度が下がった状態で〈肌に冷たさを感じるさま〉というイメージで共通している。音韻

形態の観点から見ると、「ひやり」の反復形である「ひやりひやり」は、繰り返し冷たさを肌に感じると様子を表す。次に、(B)に挙げたオノマトペは、暖かさを感じるさまというイメージで共通する部分がある。具体的な例として、「ぽかりぽかり」や「うらら」などがある。最後に、(C)に挙げたオノマトペは、温度が上がった状態で暑さを感じるさまというイメージで共通している。例えば、「むしむし」は湿気が多く、蒸し暑いという不快な状態を表す。

第５に、〈雷・稲妻に関するオノマトペ〉には、雷の音を表す擬音語と稲妻の光る様子を表す擬態語が少数ながら観察され、次の(4)のように例示される。

(4) ガラガラ　　ぴかり
　　ゴロゴロ　　ぴかりぴかり
　　ドカン　　ぴかっ

(4)において片仮名で表記された左の３つが雷の音を表す擬音語であり、平仮名で書いた右側の３つが稲妻の光る様子を表す擬態語である。日本人は普通、雷が鳴る音を表すのに、上の(4)に挙げた「ゴロゴロ」「ガラガラ」「ドカン」をよく用いる。音象徴の観点から見ると、「あ」音では大きく外に広がったニュアンスがあり、「お」音は内に籠もった丸く重いイメージである。例えば、雷の音を表すカ行のオノマトペにおいても、「ガラガラ」と「ゴロゴロ」では、前者は空から落ちてくる雷の音なのに対し、後者は今にも落ちそうな雷の雲の合間から聞こえてくる音を表しており、微妙にニュアンスが異なる【4】。このほか、音韻形態の観点から別の特徴も観察される。田守・スコウラップ（1999）は、オノマトペでは形態を２回以上反復させることが可能であるという。例えば、「雷がゴロゴロゴロと３回鳴った」というように「ゴロゴロゴロ」という表現も可能という。また、稲妻の光る様子を描写するのに「ぴかり」「ぴかりぴかり」「ぴかっと」というオノマトペも用いられる。語形と意味の関係性の観点から見ると、田守・スコウラップ（1999）は、オノマトペに用いられる促音「っ」は「急な終わり方」「スピード感」「瞬間性」を表し、「り」は「完了」あるいは「ゆったりした感じ」を表すという。前述の例から、「ぴか」という語基に促音「っ」が付いて派生した「ぴかっ」という構造は、光るのは１回だけであり、一瞬光ってすぐ消えるものであり、「り」を伴う「ぴかり」や「ぴかりぴかり」よりも光る時間が短く、一瞬のみ光るように感じられるという。

４．水に関するオノマトペ

この第４節では、〈水に関するオノマトペ〉のカテゴリーを〈雨に関するオノマトペ〉〈雪に関するオノマトペ〉〈霧に関するオノマトペ〉〈波に関するオノマトペ〉の４つに分けた上で、それぞれのカテゴリーに属するオノマトペを例示し、考察を行う。

１つ目に、〈雨に関するオノマトペ〉を見てみよう。内田博幸（2015）によれば、日本の降水量はOECD加盟34か国のなかで、アイスランド、ニュージーランドに次ぐ多さであり、2014年のデータでは、年間1668㎜で、雨に対する日本人の思い入れの強さ、ひいては雨に関するオノマトペの豊かさにつながっているとしている【5】。雨に関するオノマトペとして次の(5)のようなものが比較的多く見られる。

(5) ぽつぽつ　　しとしと　　さっ　　ざーざー
　　ぽつりぽつり　じとじと　　さーっ　ざんざん
　　ぽつっぽつっ　しょぼしょぼ　ざっ　　じゃーじゃー
　　ぽつんぽつん　びしょびしょ　ざーっ　びしゃびしゃ
　　ぱらぱら　　ぽたぽた　　ざざっ　どしゃどしゃ
　　ばらばら　　ぽたぽた　　わーっ
　　ぱらりぱらり　ぽたりぽたり

(5)に挙げたオノマトペは、雨の大小や軽重や速さと鈍さなどの様態を豊かに表すものである。具体的に、雨の降り方の弱いほうから、順に「ぽつぽつ」「ぱらぱら」「ばらばら」「しとしと」「ざーざー」「どしゃどしゃ」といった具合である。これらの多くは擬音語である。内田（2015）では、雨の降り始めの様子を表す「ぽつぽつ」は雨のしずくが物に当たった音を想像した擬音語であるが、促音「っ」、撥音「ん」、「り」を加えると「ぽつっぽつっ」「ぽつんぽつん」「ぽつりぽつり」のように雨粒がまばらな様子が強く感じられるとしている。もう少し降り方が強まると、雨粒が木の葉や窓ガラスに当たる音が「ぱらぱら」と聞こえるという。「ぱらぱら」に表記が近い語として「ばらばら」がある。この２つは、いずれも雨などが落ちる時や散らばる時の音を表わす意味的ペアであるが、無声の「ぱらぱら」は、ｐの音素を持つので、「小さいもの」や「軽いもの」が落ちる時の音や様子を表すのに対して、有声の「ばらばら」は、ｂの音素を持つので、「大きくて、大量なもの」が落ちる様子や音を表している。さらに、同じことは「ぱ」と「ば」のペアだけでなく、「さ」と「ざ」などにも見られる。次の例文を見てみよう。

(6) ａ．さーっと雨が降る。
　　ｂ．ざーっと雨が降る。

（6ａ）と（6ｂ）の例文では、いずれも雨が降る音を表すが、（6ａ）の「さーっ」の「さ」は無音声であり、雨が瞬間的に軽く降りつける音を表すのに対して、（6ｂ）の「ざーっ」の「ざ」は有声音で、雨が瞬間的に激しく打ちつける音を表している。

また、内田（2015）によると、「しとしと」は弱い雨であるが連続的な降り方が感じられるという。しかし、語頭が有声化して「じとじと」になると、途端に不快感を伴う表現になると指摘している。次の例を見てみたい。

⑺　ａ．春雨がしとしと降っている。
　　ｂ．梅雨どきはじとじとしていやだ。

⑺の「じとじと」と「しとしと」は、雨が降るときに使われるオノマトペのペアであり、語頭音の有声・無声で最小対立（minimal pair）をなしており、この点で意味的なニュアンスに差がみられる。（7ａ）の無声音で始まる「しとしと」は、雨が静かに降る様子を描写し、「心地良い」気持ちにさせられるオノマトペである。一方、（7ｂ）の有声音で始まる「じとじと」では、湿っぽくて水分や湿り気がより多いという意味を持つため、不快感が含意される。（7ｂ）に見られるように有声子音を含む「じとじと」は、無声子音の「しとしと」より「マイナス」のニュアンスが強いオノマトペであることも明確になる。さらに、内田（2015）によると、「ざーざー」は、多くの雨粒が地面や屋根に当たる音であるのに対して、「どしゃどしゃ」は地面にできた水たまりに雨粒が衝突して出す音が感じられるとされている。「どしゃ」は混雑していて騒々しい様子を表す「どさくさ」と同源で、「ど」が衝突音を表し、「しゃ」が水しぶきが飛び散る音を表していると説明している。

２つ目に、〈雪に関するオノマトペ〉については、内田（2015）は「ある調査によれば、日本、アメリカ、カナダの人口10万人以上の都市のなかで年間降雪量の多い都市トップ３を、青森・札幌・富山という日本の都市が占めていると言う。日本は雨と同様に雪も多く、したがって雪にまつわる語彙、ひいてはオノマトペも少なくない。次の⑻のようなものが挙げられる。

⑻　ちらちら　ぱらぱら　こんこん
　　ちらほら　はらはら　ザクザク
　　しんしん　キュッキュッ　サクサク

雨と同様に、雪の強さによって⑻のような幾つかのオノマトペを挙げることができるが、雨ほど段階が多くない。また、雪の降る様子について、内田（2015）は降り始めの様子を表す「ちらちら」や「ちらほら」は、雨のように直線的ではなく揺れ動きながら舞い落ちる様子が「ちらり」という音によって表されていると分析している。この類義語に「はらはら」があり、木の葉や涙にも使われ、「はら」には「ちら」より一層はかなさが感じられるという。雪があられに変わると「はらはら」が「ぱらぱら」になって物に当たる音を表すが、降る方が強くなると「しんしん」が使われるという。確かに、雪は静かに降るので「音」は聞こえない。したがって、無音の環境にあっても人間は自らの呼吸や心臓の鼓動を聴覚で感じるので「しーん」という「静寂の音」があると言われている。また、雪がしきりに降る場合は「こんこんと降る」という使い方がある。雪のオノマトペには、降り方だけではなく、積もった雪に関するオノマトペも幾つかある。例えば、冬に雪が降り新雪を踏みしめると「キュッキュッ」「サクサク」「ザクザク」という音がする。「さくさく」と表すとき、人にあっさりした感じを与えて、いい気持ちがしてくる。濁音の「ざくざく」になると、砂や泥を踏む姿を思い浮かべるようになって、汚いイメージがするかもしれないし、気持ちも変わってくるであろう。このような程度の違いも反映している。

３つ目に、〈霧に関するオノマトペ〉について検討してみよう。『大辞林』(第二版)の定義によると、霧は「地表や水面の近くで水蒸気が凝結して無数の微水な水滴となり、浮游している現象」とあるが、私たちの通常の感覚からすると、霧の様子をオノマトペで表現すれば次の⑼のようなものを挙げることができる。

⑼　うっすら　もやもや　ぼやっ（と）
　　すーっ（と）　ぼーっ（と）

⑼に挙げたオノマトペは霧の様子を表す擬態語であるが、この種類はほかのカテゴリーほど段階が多くない。「うっすら」はごく薄くかかっている霧の様子を表している。統語的な観点からすると、「うっすら」は程度副詞として機能する。また「すー」の語末に促音「っ」が付加されたオノマトペ「すーっ」は霧などが一気に晴れる様子を表現する。反復形の構造を持っている「もやもや」は霧などがたちこめて周りがぼやけてしまう様子を表わす。「もやもや」と近い意味の表現として直後に助詞の「と」が後続して「ぼやっと」「ぼーっと」という形態を持っているオノマトペも存在する。

４つ目に、〈波に関するオノマトペ〉について見てみよう。この種類は少数であるが、次の⑽のようなものを挙げることができる。

⑽　のたりのたり　ざぶーん　ざざざ
　　ちゃぷん　ごごご　ざざー

⑽に挙げたオノマトペは、波の音や波の様子を表すも

のである。水面の表情は季節や気象条件によって変化する。与謝蕪村の俳句で有名な「のたりのたり」は、春の海ののどかでゆったりとした様を詠んだもので、ほかの形容詞などでは代えがたいと思われる。波のオノマトペについて、内田（2015）は水面の様子は深さや風の強さによってさまざまな表情を見せてくれると述べている。かすかに風が吹くと、さざ波が立ちはじめ、「ざざー」や「ざざざ」などのオノマトペが用いられ、風速が数メートル程度になると波頭が立ってきて、磯に打ち寄せて岩に当たって「ざぶーん」と砕ける音が聞こえてくる。流れのイメージでは、「ざ」は波頭が細かく砕け散る音を表し、「ぶーん」は水の塊が岩にぶつかる衝撃の余韻を表している。さらに、津波、巨大な波の場合、「ごごご」が用いられる。

5．空気に関するオノマトペ

ここでは、〈空気に関するオノマトペ〉の下位カテゴリーとしての〈風に関するオノマトペ〉について、例示しながら考察を加える。

本論文では、『擬音語・擬態語4500日本語オノマトペ辞典』の「風・吹く」という項目に収録しているオノマトペの意味の解説に基づいて、〈風に関するオノマトペ〉を風の強弱によって大きく「強い風」と「弱い風」の２つに分ける。この２分類は次の表５の通りである。

表５　風に関するオノマトペの分類

風のオノマトペ	強い風	ごーっ ひゅー、ぴゅー、びゅー ひゅっ、ぴゅっ、びゅっ ひゅるるん、ぴゅんぴゅん、びゅんびゅん ひゅーひゅー、ぴゅーぴゅー、びゅーびゅー ぶぉーっ、ぶんぶん ざーっ ざわざわ、ざんざ
	弱い風	そよ、そよそよ、そより、そよりそより すーっ、すーすー さーっ、ふー さわさわ、さやさや、わさわさ、さーさー

表５のように、本論文では、〈風に関するオノマトペ〉は風の強弱によって大きく「強い風」と「弱い風」に２分類した。

まず、「強い風」の場合、田守（2009）では、日本語においては風の音を描写するオノマトペとして、「びゅうびゅう」「ぴゅうぴゅう」「ひゅうひゅう」の３種類があり、ｂはｐだけでなくｈとも交替すると分析されている。風の強さは「びゅうびゅう」が一番強く、「ひゅうひゅう」が一番弱く、ｂ＞ｐ＞ｈという順序であるという。田守（2009）では、風の音を表すオノマトペには、語頭にｂ、ｐ、ｈを持つ３種類の慣習的なオノマトペが存在するが、すべてのオノマトペにこの３種類が全部備わっているわけではなく、その種類および数はオノマトペによって異なるとされている。この３つのオノマトペの中で、特に「びゅうびゅう」は強風が生き生きとして激しく吹いている様子を示しているので、荒れ狂った台風の強さと大きさを微妙に呈すると言われている。田守（2009）が指摘したように、「びゅうびゅう」が一番強いということは音韻的に見ると、無声音より有声音の方が激しいということになる【6】。さらに、「びゅー」という１回で終わる音と「びゅーびゅー」という２回で終わる音では、「びゅーびゅー」の方が長く続いているという印象的な音節の連続が耳に強い印象を与える【7】。１回だけの風なのか、連続して吹いているかということがオノマトペの数に反映されている。ほかに、「ざわざわ」は風が吹いて木の枝葉などが一度に強く揺れ動いて発する連続音を表す場合に用いられる。「ざわざわ」は「さわさわ」とペアをなすので、次の⑾で検討したい。

⑾　ａ．秋風がさわさわと吹く。
　　ｂ．風に吹かれて木の葉がザワザワと鳴っている。

⑾の「ざわざわ」と「さわさわ」は、語頭音の有声と無声において最小対立をなす。音韻的な観点から見ると、無声の「さわさわ」が「気持ち良い・聞いた感じが良い音」を表わすのに対して、有声の「ざわざわ」は「音があまりにも強く、騒音に聞こえたり、耳ざわりに感じられたりする音」といった「マイナス」のニュアンスを持つとされる。

続いて、「弱い風」には、「そよ」「そより」「そよそよ」「そよりそより」などがある。音韻構造的な観点からみると、「そよ」と「そよそよ」を比べると、いずれも「風が静かに吹く様子」を表すが、後者の方が前者より長く吹き続けていると感じられる。「そより」と「そよりそより」を比べると、前者は「風が静かに吹きすぎる様子」を表すのに対して、後者は「風が軽く続けて吹く様子」を表す。すなわち、上掲の例においては、２モーラの反復形（全体で４モーラ）の方が長く継続しているように解釈される。また、「さわさわ」と「さやさや」は風が吹きつけて木の葉、枯れ葉などが軽く触れ合って鳴る場合に用いられる。ほかには、「わさわさ」は草や木の葉を大きく揺らす様子を表し、「さーさー」は風で木の葉などがこすれ合って立てる軽やかな音を表すものである。

６．アンケート調査分析

この第６節では、アンケート調査より先行研究における記述と母語話者の実感との異同を明らかにする。

まず、アンケート調査の目的と手順を提示する。浜野（2014）は、オノマトペの構成音と意味の関係について多くの現象を論じた研究であるが、本論文では、そのうち４つの音韻的な対立関係を取り上げて検証する。４つの音韻的な対立関係とは、①無声と有声、②長音の有無、③母音ｏとａ、④促音と「り」の関係、の４つであり、次の表６の左の欄に示している。

表６　音韻の対立関係

対立関係	音韻の働き
無声と有声	有声音は無声音に比べて、「運動の力や物の質量が大きい」ことを意味する。有声音の方が無声音より否定的なニュアンスを含む。
長音の有無	長音は運動の反動【8】を持続する。
母音ｏとａの違い	ａは広がりを表し、ｏは広がらずに前に出る感じを表す。
促音と「り」	「り」は促音「っ」と比べて「運動がゆったりと或は静かに起こること」を表す。

無声 / 有声の欄で言うと、浜野（2014）は、有声音は無声音に比べて「運動の力や物の質量が大きい」ことを意味すると述べている。この点について、田守（2010）も言及しており、「有声音の方が無声音より否定的なニュアンスを含む」という。この２つの特徴はオノマトペの一般的な傾向とされてきたが、〈気象現象に関するオノマトペ〉の場合にもこのような傾向が見られるかどうかを検証する。２つ目に、長音の有無による違いについて、浜野（2014）によれば、長音には運動や動作が持続する効果があるとされているので、この点を検証する。３つ目に、母音ｏとａの違いについて、ａは広がりを表し、ｏは音声的にも意味的にも「広がらずに前に出る」という意味を表すとされているが、〈気象現象に関するオノマトペ〉の場合にも当てはまるかを検証する。最後に、オノマトペの語尾につく促音「っ」と「り」の関係について、「り」は促音「っ」と比べて「運動がゆったりとあるいは静かに起こること」を表すとされているので、この点を検証する。

アンケート調査の目的は、上述したように、〈気象現象に関するオノマトペ〉について先行文献における記述と母語話者の実感との異同を明らかにすることである。アンケートの内容としては、〈気象現象に関するオノマトペ〉について設問を８問作成した。そのうち、問題１、問題３、問題４、問題８には枝問が２つあるので、全部で12問あり、すべてＡ・Ｂ・Ｃの３つから１つを選択する形式を採った。アンケート調査の実施状況としては、兵庫教育大学の学部生および大学院生、併せて130名であり、日本語母語話者のみを集計の対象とした。このアンケートは、2020年７月28日、2020年７月29日、2020年10月16日に紙面調査形式で行った。

次に、問題１から問題４について、アンケート調査の結果を提示し、考察を加える。

問題１：風が吹く音をオノマトペで表すとき、あなたは「風がピューピュー吹いている」と「風がビュービュー吹いている」では、①どちらの音の方が激しいように感じますか。②どちらの音の方が不快な風に感じますか。

①について
Ａ．ピューピュー　Ｂ．ビュービュー　Ｃ．変わらない

②について
Ａ．ピューピュー　Ｂ．ビュービュー　Ｃ．変わらない

表７　風が吹く音の激しさ

選択肢	回答数（人）	割合（％）
ピューピュー	2	1.6
ビュービュー	127	97.6
変わらない	1	0.8

問題１では、２つの枝問に回答するように求めた。①では、風が吹く音の「激しさ」について、有声音と無声音の違いを問うている。上述のように、浜野（2014）や田守（2010）の記述から、有声音の「ビュービュー」という音の方が無声音の「ピューピュー」より激しいように感じると予想される。今回の結果としては、上の表７に示すように、有声音の「ビュービュー」の方が圧倒的に全体の９割以上を占めており、予想と同じ結果となった。ここでも、浜野（2014）と同じ結果が得られたといえる。

表８　風が吹く音の不快感

選択肢	回答数（人）	割合（％）
ピューピュー	42	32.3
ビュービュー	55	42.3
変わらない	33	25.4

②では、風が吹く音の「不快感」について、無声音と

有声音の違いを問うたものである。先行研究では、オノマトペの一般的な傾向として、「有声音の方が無声音より否定的なニュアンスを含む」とされている。では、「ビュービュー」は有声音を語頭に持つ〈風に関するオノマトペ〉として一般的なオノマトペと同じように否定的な印象を与える傾向があるのだろうか。それを考えるにあたっては『擬音語擬態語4500日本語オノマトペ辞典』の各オノマトペの解説文を参考にすることにした。上記の辞典のオノマトペの解説には、オノマトペによって与えられる否定的な印象が「不快な様子」などの言葉で表され、意味の書き分けに用いられている。ここからは、今回、風の強弱について、否定的な印象を表す言葉として「不快」という表現を用いることとした。有声音を語頭に持つ「ビュービュー」という音のほうが、不快な風と感じさせるという予想だったが、今回の結果としては、上の表８に示すように、選択肢「ビュービュー」がやや多くなったものの、それぞれの選択肢に分かれたといえよう。この結果から、アンケート調査をした限りでは、「不快」かどうかについては簡単に言えるものではないということが分かった。むしろ、ここから分かることは強い風か弱い風かについては、人によって好き嫌いが違うということである。その要因として、次の２つが挙げられる。１つ目は個人差があること、２つ目は「不快」というものが客観的に定義しにくいことである。この２つの点は、消極的な帰結といえるものであるが、より興味深いと思われるのは、強い風を不快と感じる人と弱い風を不快と感じる人が、ほぼ同数だったということである。もう少し詳しく言うと、枝問①において約98％の人が有声音の「ビュービュー」の方が激しい風と答えていることから、有声音の方が激しい風を表すということができる。その上で、枝問②において、有声音と無声音の回答数に有意差が出なかったということは、有声音で表される風（＝相対的に強い風）を不快と感じる人もいれば無声音で表される風（＝相対的に弱い風）を不快と感じる人もいるということであり、風に関する快・不快の解釈は、結局、一般的な傾向があるというものではないことが分かる。実際、人によって強い風を快（あるいは不快）と感じる人もいれば、弱い風を快（あるいは不快）と感じる人もいるというのは、経験的にも納得できるように思われる。言い換えれば、風というものに対する感じ方は一様ではなく、風は強いから心地よいとか弱いから心地よいというものではないということであり、これは、雨や雪といった他の気象現象には見られない点で、「風」に特有の現象と言えるであろう。

問題２：新雪を踏みしめるときの音をオノマトペで表すとき、あなたは「サクサク」と「ザクザク」では、どちらの音の方が、雪の上を歩くのに不快（歩きにくい）と感じますか。

A．サクサク　B．ザクザク　C．変わらない

表９　新雪を踏みしめるときの音の不快感

選択肢	回答数（人）	割合（％）
サクサク	12	9
ザクザク	104	80
変わらない	14	11

問題２では、新雪を踏みしめるときの音の「不快感」について、有声音と無声音の違いを問うたものである。先行研究によると、「有声音の方が無声音より否定的なニュアンスを含む」とされている。問題２でも〈雪に関するオノマトペ〉について否定的な印象を表す言葉として「不快」という表現を用いることとした。その理由は、問題１の②で説明した通りである。有声音の「ザクザク」という音の方が無声音の「サクサク」より、雪の上を歩くのに不快(歩きにくい)と感じさせると予想されるが、今回の結果としては、上の表９に示すように、予想とおりの選択肢「ザクザク」の方が多いという結果になった。ここでも、先行研究と同じ結果が得られたといえる。

問題３：草木の葉が風に吹かれて音を立てる様子をオノマトペで表すのに、「風に吹かれて木の葉がサワサワと鳴った」と「風に吹かれて木の葉がザワザワと鳴った」という２通りの表現が使われていたとき、あなたは、①どちらの音の方が風が強いように感じますか。②どちらの音の方が不快な風に感じますか。

①について
A．サワサワ　B．ザワザワ　C．変わらない

②について
A．サワサワ　B．ザワザワ　C．変わらない

表10　草木の葉が風に吹かれて音を立てる音の強さ

選択肢	回答数（人）	割合（％）
サワサワ	0	0
ザワザワ	130	100
変わらない	0	0

問題３では、①と②の２つの枝問に回答を求めた。①では、草木の葉が風に吹かれて音を立てる様子またその音の「強さ」について、有声音と無声音の違いを問うたものである。先行研究によると、有声音は無声音より「運

動の力や物の質量が大きい」ことを意味するとされているから、有声音の「ザワザワ」の方が無声音の「サワサワ」より、風が強いように感じさせると予想される。今回の結果としては、上の表10に示すように、有声音の「ザワザワ」が圧倒的に全体の100％を占めており、予想と同じ結果となった。ここでも、先行研究の記述と同じ結果が得られた。

表11　草木の葉が風に吹かれて音を立てる音の不快感

選択肢	回答数（人）	割合（％）
サワサワ	11	8
ザワザワ	92	71
変わらない	27	21

②では、草木の葉が風に吹かれて音を立てる様子またその音の「不快感」について、有声音と無声音の違いを問うている。先行研究によると、「有声音の方が無声音より否定的なニュアンスを含む」とされている。したがって、有声音の「ザワザワ」という音の方が無声音の「サワサワ」より、不快な風に感じさせると予想される。今回の結果としては、上の表11に示すように、有声音の「ザワザワ」の方が全体の７割以上の回答数を占めている。この結果から、先行研究の記述と同じ結果が得られた。

問題４：雨が降る音をオノマトペで表すのに、「パラパラ降ってきた」と「バラバラ降ってきた」という２通りの表現が使われていたとき、あなたは、①どちらの音の方が、より弱く降っているように感じますか。②どちらの音の方が不快な雨に感じますか。

①について
A．パラパラ　B．バラバラ　C．変わらない

②について
A．パラパラ　B．バラバラ　C．変わらない

表12　雨が降る音の弱さ

選択肢	回答数（人）	割合（％）
パラパラ	127	97.6
バラバラ	2	1.6
変わらない	1	0.8

問題４でも、①と②の２つの枝問に回答を求めた。①では、雨が降る音の「弱さ」について、有声音と無声音の違いを問うている。浜野（2014）は、有声音は無声音より「運動の力や物の質量が大きい」ことを意味すると述べた。具体的には、無声音は「軽いもの、弱い力」を現し、有声音は「重いもの、強い力」を現すという。「雨がパラパラ降ってきた」の「パラパラと「雨がバラバラ降ってきた」の「バラバラ」という用例は浜野（2014:154）から引用したが、実際に「バラバラ」は「パラパラ」に比べて、「雨」についての使用は頻度が低い。そのため、アンケート調査では、雨が降る音を表すのに、「バラバラ」という表現が使われていることを前提として設問した。自然の段階では、無声音の「パラパラ」の方が有声音の「バラバラ」より弱く降っているように感じさせると予想していたが、実際の結果としては、上の表12に示すように、選択肢「パラパラ」の方が全体の10割近くの回答数を占めており、予想と同じ結果となった。ここでも、先行研究の記述と同じ結果が得られた。

表13　雨が降る音の不快感

選択肢	回答数（人）	割合（％）
パラパラ	4	3
バラバラ	97	75
変わらない	29	22

②では、雨が降る音の「不快感」について、有声音と無声音の違いを問うたものである。先行研究によると、「有声音の方が無声音より否定的なニュアンスを含む」とされている。したがって、今回、有声音の「バラバラ」という音の方が無声音の「パラパラ」より、不快な雨に感じさせると予想される。②の結果としては、有声音の「バラバラ」の方が圧倒的に全体の７割以上の回答数を占めている。この結果から、先行研究の記述と同じ結果が得られたといえる。

最後に、問題５から問題８それぞれについて、アンケート調査の結果を提示し、考察を加える。

問題５：波が磯に打ち寄せて岩に当たって砕けるときの音をオノマトペで表すとき、あなたは「ザブン」と「ザブーン」では、どちらの音の方が、波が大きいと感じますか。

A．ザブン　B．ザブーン　C．変わらない

表14　波が磯に打ち寄せて岩に当たって砕けるときの音

選択肢	回答数（人）	割合（％）
ザブン	0	0
ザブーン	127	98
変わらない	3	2

問題５では、波が磯に打ち寄せて岩に当たって砕けるときの音を事例として、「大きさ」と長音の有無の関係を問うている。浜野（2014）は、長音の意味は、撥音の前では、「語末の撥音で発表される運動の反動が持続すること」であり、促音の前では、「接触があってから、それ以前と同じ方向に運動が継続すること」を表すと述べているが、長音の有無による音の「大きさ」の違いについては言及していなかった。具体的には、促音の前で長音が入る「さーっ」と長音が入らない「さっ」はどのようなニュアンスの違いがあるだろうか。『擬音語擬態語4500日本語オノマトペ辞典』では、「風や雨、波などが瞬間的に軽く吹きつける音。また、そのさま。」と「さーっ」の意味の１つとして記述されている。「さっ」の意味の１つとして「風や雨などが瞬間的に急に吹いたり、降ったりするさま。にわかに。」が挙げられているが、辞典の意味の両者を比較してみると、長音が入ることにより、「さーつ」の方が「さっ」より風が続いていると感じられる。では、撥音の前で長音が入る「ザブーン」と長音が入らない「ザブン」の間にはどのようなニュアンスの違いがあるだろうか。それをここで明らかにしたい。今回の結果としては、上の表14のように、選択肢「ザブーン」の方が圧倒的に全体の９割以上を占めている。長音を入れることにより、波の音が長く持続される効果が適用され、結果として、長音が入る「ザブーン」の方が長音が入らない「ザブン」より波をより大きく感じさせていることが分かる。この結果から、波の音を表すオノマトペの場合、長音が入るオノマトペの方が長音が入らないオノマトペより大きいと感じさせるということが分かる。

問題６：雷鳴がとどろく音をオノマトペで表すのに、「ゴロゴロドッシャーン」と「ガラガラドッシャーン」という２通りの表現が使われていたとき、あなたは、どちらの音の方が、雷鳴が大きく広がっていくように感じますか。

A．ゴロゴロ　　B．ガラガラ　　C．変わらない

表15　雷鳴がとどろく音

選択肢	回答数（人）	割合（%）
ゴロゴロ	44	34
ガラガラ	66	51
変わらない	20	15

問題６では、雷鳴がとどろく音を題材に、母音ａとｏの違いを問うたものである。浜野（2014）によると、ａは広がりを表し、ｏは音声的にも意味的にも「広がらずに前に出る」という意味を表すとされている。雷の音を表すオノマトペの場合、母音ａとｏの違いについて、田嶋（2006）では、雷の音を表すカ行のオノマトペにおいても、「ガラガラ」と「ゴロゴロ」では、前者は空から落ちてくる雷の音を後者は今にも落ちそうな雷の雲の合間から聞こえてくる音を表しており、微妙にニュアンスは違うと記述されているが、実際に「ガラガラ」は「ゴロゴロ」に比べて、「雷」についての使用は頻度が低いので、今回のアンケート調査では、雷の音を表すのに、「ガラガラ」という表現が使われていることを前提として設問した。大きく広がっていくと感じられるのは選択肢「ガラガラ」と予想していたが、その予想通り、今回の結果としては、「ガラガラ」が多くなったものの、他の２つの選択肢にも回答者は散らばっていた。この結果からは、先行研究と同じ結果が得られたと言えず、雷鳴がとどろく音だけでは、母音ａとｏのニュアンスの違いはここで明らかにできない。したがって、追加的に、気象現象のオノマトペ以外の場合でも検証する必要がある。そこで、次の問題７において、豆がこぼれる様子について、母音ａとｏのニュアンスの違いを明らかにしたい。

問題７：豆がこぼれる様子をオノマトペで表すとき、あなたは「豆がバラバラこぼれる」と「豆がボロボロこぼれる」では、どちらの方が豆が大きく広がっていくように感じますか。

A．ボロボロ　　B．バラバラ　　C．変わらない

表16　豆がこぼれる様子

選択肢	回答数（人）	割合（%）
ボロボロ	31	24
バラバラ	83	64
変わらない	16	12

問題７では、豆がこぼれる様子について、母音ａとｏの違いを問うたものである。浜野（2014）は、オノマトペの一般的な傾向として、ａは広がりを表し、ｏは音声的にも意味的にも「広がらずに前に出る」という意味を表すという。このことについて、田守（2002）も言及しており、「豆がバラバラこぼれる」の「バラバラ」からは、豆が比較的広範囲にこぼれる様子がイメージされるが、「豆がボロボロこぼれる」の「ボロボロ」からは、豆が限られた箇所にこぼれる様子がイメージされると述べている。そこで、問題６と同様に、大きく広がっていくと感じられるのは選択肢「バラバラ」だと予想される。実際の結果としては、その予想通り、有声音の「バラバラ」が最も多くなり、全体の６割以上を占めている。問題６と問題７の結果をまとめると、物質的なモノとしての

「豆」の場合は、母音ｏより母音ａの方が大きく広がっていくように感じられているのに対し、現象としての「雷」の場合は、「豆」よりも差が小さくなる点について、対象そのものの性質の違いに帰着されると思われる。「豆」の場合に64:24という大きな差がついているのは「豆」が物質的なモノであり、拡がり方が明確であるからなのであって、「雷」の場合に51:34のように相対的に差異が小さくなるのは、「雷」というものが光の伝達という瞬間的な現象であって、拡がり方を明確に捉えることが難しいためと説明することもできる。「豆」というモノでさえ64％であることから言えば、「雷」という現象が51％というのは、母音ａの拡大性は支持されていると言えるだろう。

問題８：稲妻が光るときの様子をオノマトペで表すとき、あなたは「稲妻がピカッと光った」と「稲妻がピカリと光った」では、①どちらの方が稲妻の光が強いように感じますか。②どちらの方が稲妻の光が短いように感じますか。

①について
Ａ．ピカッ　Ｂ．ピカリ　Ｃ．変わらない

②について
Ａ．ピカッ　Ｂ．ピカリ　Ｃ．変わらない

表17　稲妻が光るときの強さ

選択肢	回答数（人）	割合（％）
ピカッ	88	67.7
ピカリ	14	10.8
変わらない	28	21.5

問題８では、２つの枝問に回答を求めた。①では、稲妻が光るときの「強さ」について、語尾につく促音「っ」と「り」の違いを問うたものである。先行研究では、語尾につく促音「っ」と「り」の違いについて、稲妻が光るときの様子に対し強いか弱いかという観点からの言及はなく、その違いをここで明らかにしようとした。今回の結果は上の表17に示すように、語尾につく促音の「ピカッ」の方が語尾に「り」が付いた「ピカリ」より多く、全体の回答の約７割を占めている。この結果から、稲妻を表すオノマトペの場合も語尾につく促音「っ」の方が語尾につく「り」より、強いということが分かった。

表18　稲妻が光るときの短さ

選択肢	回答数（人）	割合（％）
ピカッ	117	90.0
ピカリ	7	5.4
変わらない	6	4.6

②では、稲妻が光るときの「短さ」について、語尾につく促音「っ」と「り」の違いを問うたものである。先行研究では、オノマトペの語尾につく促音と「り」の関係については、「り」は促音「っ」と比べて「運動がゆったりと或は静かに起こること」を表すとされている。具体的な例としては、語尾に「り」を伴う「ころり」は語尾に「促音」を伴う「ころっ」よりも転がり方がゆったりしているように感じられる。では、稲妻の光る様子について、「ぴかっ」と「ぴかり」にはどのようなニュアンスの違いがあるだろうか。『擬音語擬態語4500日本語オノマトペ辞典』では、「ぴかり」の意味の１つとしては「一瞬、鋭く光り輝くさま。光のひらめくさま。」と記述されている。「ぴかっ」の意味の１つとして「一瞬、鋭く輝くさま。ぴかり」が挙げられている。辞典の意味の両者を比較してみると、「ぴかっ」と「ぴかり」とに大きな差異はないとされており、今までの研究にも、稲妻が光るときの「短さ」の言及はないので、ここで明らかにしようとするものである。短いと感じられるのは選択肢「ピカッ」と予想していたのだが、その予想通り、今回の結果は選択肢「ピカッ」の方が圧倒的に多く、全体の回答の９割を占めている。この結果から、稲妻を表すオノマトペの場合も語尾につく促音「っ」の方が語尾につく「り」より短いということが分かる。

７．おわりに

本論文では、日本語における〈気象現象に関するオノマトペ〉に焦点を当てて、言語学的観点から分析を加えた。具体的には、〈気象現象に関するオノマトペ〉を〈光に関するオノマトペ〉〈水に関するオノマトペ〉〈空気に関するオノマトペ〉の３つ分ける分類法を提案した上で、音韻形態的特徴のほか、音と意味の関係の諸特徴を整理しつつ、先行研究における記述と母語話者の感覚の異同を明らかにした。本論文におけるアンケート調査から得られた帰結は次のように整理できる。

［ｉ］　先行文献で「有声音＝不快」という一般的な特徴が指摘されている中で、風が吹く音に関する限り、「有声音＝不快」という傾向は見られなかった。このことは、風の強弱については、強い風を不快と感じる人と弱い風を不快と感じる人がほぼ同数であったことに帰着されるものと思われる。

［ⅱ］ 促音「っ」と「り」を使って稲妻が光る様子を表現するとき、アンケート調査をした限りでは、語尾につく促音「っ」の方が語尾につく「り」より強いことが分かった。

［ⅲ］ 母音ａと母音ｏを使って雷鳴がとどろく音を表現するとき、アンケート調査をした限りでは、母音ａの拡大性は支持されていると言えるが、拡がり方を明確に捉えることは難しいことが分かった。

以上の３つの結論は第６節で論じたものであり、本論文の主たる成果といってよい。

その上で、今後の課題として次の２点が挙げられる。１つ目に、上述の［ⅰ］のように言語外的な要因を視野に入れつつ、原因が未解明の［ⅲ］について分析を進めることである。２つ目に、本論文では、〈気象現象に関するオノマトペ〉について基礎的な研究を行ったところであるが、音響や視覚情報などを含め多角的な研究に発展させていかなければならないという点である。

注

［１］ 吉川（2013）によると、〈スポーツオノマトペ〉とは、「運動やスポーツ領域で活用されている擬音語・擬態語」をいう。

［２］ ただし、「雲」は上記で説明したように、〈光に関するオノマトペ〉として扱うこととする。

［３］ ただし、本論文でいう〈気象現象に関するオノマトペ〉の中に「土」に関するものは入れないこととする。「土」を入れると、地震や地滑りのように直接の気象現象ではないものが関わってくるためである。

［４］ 「ガラガラ」と「ゴロゴロ」のニュアンスの違いについて、第６節で詳しく議論する。

［５］ 雨に対する日本人の思い入れの強さを反映するように、倉嶋厚・原田稔(2014)や高橋順子(2001)のような著作もある。

［６］ 有声音の方が激しいということについては第６節で再び詳しく議論する。

［７］ 「びゅー」よりも「びゅーびゅー」の方が長く続いているという意味を担う点については、「類像性（iconicity）」の一種と考えてよい。類像性とは、およそ「記号が意味あるいは概念を（ある程度まで）直接的に反映すること」をいう。

［８］ 反動とは、浜野（2014）が使った用語であるが、意味としては運動の持続ということを言っている。

参考文献

浅野百合子（1979）「ヒカル・カガヤク・テル」『ことばの意味Ⅱ：辞書に書いてないこと』, pp. 276-283, 平凡社.

浜野祥子（2014）『日本語のオノマトペ―音象徴と構造―』くろしお出版.

和達清夫（1974）『新版 気象の事典』東京堂出版.

倉嶋厚・原田稔（2014）『雨のことば辞典』講談社学術文庫.

桑原明栄子（2016）「オノマトペの可視化―模様による天候のオノマトペの可視化に関する調査―」『可視化情報学会誌』第36巻, pp. 29-32

前田千菜美（2014）「光を表す擬態語の使い分け」『山口国文』37巻, pp. 13-24, 山口大学人文学部国語国文学会.

松村明（1999）『大辞林(第二版)』三省堂.

小野正弘（2007）『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』小学館.

PHAM THI LINH CHI（2021）「日本語とベトナム語における気象現象のオノマトペに関する対照研究」兵庫教育大学修士論文.

杉田淳子（2014）『宮沢賢治のオノマトペ集』ちくま文庫.

田嶋香織（2006）「オノマトペ（擬音語・擬態語）について」『日本語教育論集』第16巻, pp. 198-199, 関西外国語大学留学生別科.

高橋順子（2001）『雨の名前』小学館.

竹本江梨（2012）「日本語の擬音語・擬態語の意味構造における複合感覚―脳科学的所見およびアリストテレスの共通感覚に照らして―」第42号, pp. 187-189, 名古屋外国語大学外国語学部紀要.

田守育啓（2010）『賢治オノマトペの謎を解く』大修館書店.

田守育啓（2009）「宮澤賢治特有のオノマトペ― 慣習的オノマトペから 音韻変化により派生した非慣習的オノマトペ―」『人文論集』第44巻, 第1・2号, pp. 72-73.

田守育啓（2002）『ノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店.

田守育啓・ローレンス スコウラップ（1999）『オノマトペ―形態と意味―』くろしお出版.

内田博幸（2015）「雨と雪とオノマトペ」『IHI 技報』第55巻・第４号, pp. 22-23.

吉川政夫（2013）「運動のコツを伝えるスポーツオノマトペ」『バイオメカニズム学会誌』第37巻・第４号, pp. 215-220.